

林京子の仕事

渡邊 澄子

On works of Hayashi Kyoko

Watanabe Sumiko

イギリスの天文学者、マーティン・リースという人が、核問題、地球環境問題、バイオテロリズムなどによって、二一世紀は、もしかしたら、人類最後の世紀になるかもしれないと警告した『人類最後の世紀』という本を出版したという。この本の所在を紹介した長谷川真理子は、動物行動学・行動生態学を専門とする学者の立場から、広島・長崎を実際に経験していない欧米の学者は、放射能の恐ろしさを過小評価している、「究極の兵器」である核兵器ではなくても、原子力発電所の核廃棄物が「究極のゴミ問題」であり、地球表面の全生産性を超える（地球一・二個分）エネルギーの使い過ぎによる深刻な地球環境問題も引き起こしているが、これらはすべて人間の知性の産物であると述べ、際限のない、好奇心も含む知的な人間の欲望を、知性によっていかに制御できるかが二一世紀を最後の世紀にしないための課題だろうという意味の文言で締め括っている¹⁾。

及ばずながら、日本の東京の片隅で十年以上も前からこの問題は私も発言し続けてきていることで、事新しい論ではない。だが、知性の欲望、欲望の知性は権力欲と絡んで、現実には破滅への道をひた走っている。日本も例外ではなく世界各地を襲った異常気象が地球環境破壊の深刻さを証明している。だが、現状は、世界の知性を結集してその阻止をはかるよりも欲望に憑かれた権力闘争に力は注がれている。長谷川真理子の発言に世界各国の指導者（権力者）、知者は真剣に耳を傾けなければならない。その義務と責任があるだろう。

ところで、地球環境問題の中心的問題に核、放射能問題がある。「究極の兵器」である原爆や水爆は広島・長崎以後、幸いなことに使われてはいないが、大変な数がアメリカをはじめとした多くの国に保持されていて、新たにこの恐ろしい兵器に食指をのばしている国がある。米政府

は小型核兵器の開発に踏み出そうとしているとの報道もあった。何も原爆、水爆といった禍々しい兵器を持ち出すまでもなく劣化ウラン弾によつて多くの人を放射能汚染で苦しめている現況がある。言わずもがなのことながら、敢えて、米国人女性科学者ローレン・モレの言葉を借りて劣化ウラン弾とはどんなものか知っておこう。劣化ウラン弾による汚染は一過性のものではないという。「劣化ウランを撃つと百七十度で燃焼し、酸化ウランとなり、電子顕微鏡でも見えないほどの細かい不溶性の粒となつて空中に飛散する。人の体内では放射能のガスのように振る舞い、肺にとどまり、血液を通じて全身に回る。上空に浮遊していたものが雨と一緒に落ちて周辺国にも汚染は及ぶ。土壌、水を汚染し、食物連鎖の中にも入っていく」というもので、ガンや白血病、脳のダメージなどで死にも至るという。米国は九一年の湾岸戦争で本格的に使い始め、三三〇トンの砲弾を使ったが、ボスニヤ・ヘルツェゴビナやコンゴ紛争でも使用を認めているが、イラク戦争では湾岸戦争時の三から六倍、千トンから二千トンの劣化ウラン弾が使われたと言ひ、いまや「ヒバクシャのグローバル化」が起こっているとも語っている。

戦争と直結する核爆弾実験もこの範疇に入るが、平和利用の大義名分をかざす原子力発電所の問題も決して例外ではない。卑近な例として東海村の臨界事故がそのことを明快に証明している。

ようやくして本論に入る。前掲の二人の女性の警告をいち早く文学として、ということは人間の問題として鋭く発言し続けている唯一の作家が林京子である。林京子の仕事、林京子の存在は、今、まさに「最後の世紀」を避けるための地球規模での中軸と言える。林京子の文学は大きく原爆もの、上海もの、アメリカものの三分野に分けられるが、全体を貫通する太い柱は自己の被爆に基づく原子爆弾Ⅱ核・放射能問題である。個人の意志や努力とは無関係に生死が決められてしまう理不尽さをどう納得すればいいのだろうか。

林京子の近作は「ぶーらんこ ぶーらんこ」(『群像』03・4)で、(上海もの)である。生まれたのは長崎県長崎市だが一歳の誕生前に、三井物産勤務の父の上海支社赴任で家族揃つて上海に赴き、ここで育っている。時代は十五年戦争下で侵略者の側に立つが、軍部の対中国人態度がどのようなものであったとしても、子どもたちには子どもたちの世界があった。現地の子どもたちと子どもらしく遊んでもいたのだ。戦局悪化で、居残る父と別れ、母に連れられて姉妹四人が一カ月がかりで長崎県諫早市に疎開したのは四五五年の三月末だった。その間、満一歳時に第一次上海事件勃発で、満六歳時に日中戦争の発端となる廬溝橋事件の折、危険を避けて短期間長崎に避難してはいるが、実質は上海を生育地としている。住み慣れた上海を離れ、ほとんど馴染みのない日本に辿り着いた彼女を待っていたのは学徒動員だった。転校した県立長崎高等女学校で勉強のできたのはたったひと月にもみたくない。五月には三菱長崎兵器製作所大橋工場勤務となる。一四歳の少女が生活習慣の全く異なる場所におずおずと身をすりいれて、分かり合える友達もまだできないうちに今度はまたも環境の極端に異質な工場勤務になったその急激な変化に順応しきれないうちに八月九日のあの瞬間を体験させられてしまったのだ。まるで被爆するために帰国したかのように言葉を失う。どの

ように想像力豊かな者にも非被爆者が被爆者の体験を共有することは不可能だろう。被爆した作業場所は爆心地から一・四キロメートルだった。奇跡的に無傷だった。倒壊した建物の下から必死に這い出ると、死体だらけの、朝見た建物が消え、燃え、破壊され、これがつい先ほどまで目にしてきたヒトなのだろうか、不思議に思う余裕もなく、無惨に形もなく転がる死体、裸同然の姿を羞恥の感覚もなく呆然と座り込んでいるひと、水、水を、助けて、と囁くようにうつろによびかけるひとたちを、感情もなく見過ごして、道が道ではなくなっている道を学校の方向に向かって歩き、彷徨して夕刻、下宿に辿り着いている。この道は爆心地に向かう道でもあったがそのようなことを知るよしもない。無傷は無傷のままではない。苦悶の日の始まりとなる。

被爆体験を表現し始めるのは被爆後ほぼ三〇年経てからだ。被爆時に無傷だった者もすぐに症状が現れて血を吐いて必ず死ぬという風評が流れる。風評の真实性を証明するかのよう林京子にも原爆症状が現れ、衰弱が歩度を加速していく。生き残ったクラスメートたちの訃報が連日伝えられる。無限の可能性、バラ色の夢に充たされているはずの少女に明日への希望が持てない絶望感に怯える心情はどんなだろうか、と想像してみるがそれは不可能だ。林京子が今日、現在まで生き延びられたことは奇跡的幸運としか思えない。「被爆していなければ書くことはなかっただろう」と林京子は言う。被爆者手帳を手に、半年ごとの検診生活は、生きるのが当たり前の者にとっては一年先、五年先、一〇年先の予定や希望をもてる、それが自然な人間の生活だろうのに、むしろ、死が当然で、半年先の予定も約束も叶わぬ、死に脅迫され続けの毎日となるが、ともかく結婚し、一児の母となる。被爆者が母になるということへの葛藤、苦悶について被爆していない者のなまじな言葉は傲慢であろう。死に脅迫される日常を生きる被爆者の林京子は、非被爆者の夫と離婚する。自己の原爆症が愛児にどのような影響をもたらすだろうか、子に対する責任問題と絡んで林京子の心はこの問題で常時晴れることはない。しかも、子が母に隠れて被爆二世問題について書かれていた新聞をそっと読んでいる場面を見てしまう。全身を竜巻が襲っただろう。息子に手がかからなくなった頃、カルチャーセンターの軽い気持ちで『文芸首都』に参加してみた、と語っているが、深層心理には子への思いを表現することで説明責任を果たしたいとの思いがあったのではないだろうか。少女時代から作家を夢みていたという文学少女ではなかったらしい。『文芸首都』で、小説は作り物という認識で書いてみたものの中に、味付けのつもりで被爆者の女の子と進駐軍のことを書き込んで投稿したところ、ここを中心に長くかくように指摘されたのがきっかけとなり、被爆者の子への影響に対する恐怖と相俟って原爆問題に真向かうことになったという。そして、書かれたのが『群像』新人文学賞と芥川賞を二重受賞した『祭りの場』である。被爆から三〇年、四四歳の遅い出発だった。

私が林京子を現代作家の第一位に挙げる理由を先走ることになるが述べておきたい。その理由の説明として格好のことばに出会ったので借用することに。大江健三郎のことばである。「人間がなぜ他の生命を奪ってはならないかは、モラルの中心にあります。」「しかし、『9・11』

以後、世界に君臨するブッシュ体制がやり続けた、グロテスクな規模の『自転車操業』は、暴力をさらに大きい暴力で押さえ込むとすることです。(略) ニューヨークで顕在化した暴力の極を押さえ込むはずの戦争が、絶対優位をはこる核兵器の暴力の極にも、さらにおぞましい展開のありうると露呈したのです。小泉政権は、ブッシュ体制にしがみついて走り、国内に抵抗の声が結集する余裕を与えず、(略) いつでも戦時体制に入れる法案を成立させました。そのようにしてかれらが壊してゆく国の大本の整合性を、今度は憲法を改定して一挙にとのえる魂胆です。」「暴力をしずめるためには、暴力でなく言葉こそ力をもつと、いま本心に必要な心のノートを書くなら、私は広島と長崎からの言葉が伝えられねばならぬと思います。(略) いまブッシュ体制のみならず世界の核保有国、また核拡散を狙う潜在的な諸勢力が、諸刃の剣を承知で抱え込むのは、核の文明です。しかし、被爆者たちが出発点とし、新しい文化の原理として持ち続け、原爆への疑いをふくめて、世界に影響を広げているのは、核の文明の否定です。』と。「核の文明の否定」を自身の命を賭けて「言葉」によって発信し続けている唯一といってもいい文学者が林京子である。

林京子は神経質過ぎるくらい、政治的あるいは思想的反核・反戦者と見られることを拒否し嫌悪している。この立場、姿勢は一貫している。政治的・思想的であっていいではないか、この問題は政治的・思想的問題そのものだからと私はおもうのだが。林京子が「書く」原点は、「昭和二十年八月九日、皮を剥がれたイナバノシロウサギの状態で全身を焼かれて、大地に放り出されていた長崎の人たちのなかを、脇目もふらずに逃げた女学生」として、「血肉にしみついている」八月九日の「死嗅」を伝えずにいられずに綴っているだけ、と、述べていて、政治や思想とは無縁の〈フツウのヒト〉の〈フツウのカンカク〉を強調している。林京子の作品が深い感動をよぶのはまさにその点にあるだろう。誇張や嘘のない正直さである。その正直さから、客観的には次第に政治的、思想的になってきていることも否定できない。例えば、「戦争ほど虚しいものはない。戦争ほど、あらゆる生命を無下に抹殺してしまう行為はない。」「米国のナショナリズムに巻き込まれたのか、米国がそうであったように、日本もこの機を待っていたのか、日本の政治家たちの戦争容認の発言」や、「戦争に聖戦はないのである。釈明もないのである。」云々も、もっと明確に『非核の政府を求める会ニュース』のインタビュー記事として「知性と理性を信じ次代に伝えたい 核兵器廃絶、生命の尊さを」(02・9・15)には、外国の、原爆問題を卒論テーマとした女子学生から、「日本人は敗戦と原爆のショックによって被害者意識を持った」、また、「原爆文学は被害者意識を強めることに貢献したという意見もある」といった手紙がきたことに触れて、このような歴史観に強い怒りを抱いたこと、そして、「日本の政府には、被爆国として、核兵器廃絶にたいして真剣に向き合ってほしいと思います。日本はすばらしい平和憲法をもっています。しかし、現実が残念ながら逆行ですね。有事法制とか、『非核三原則見直し』発言など、恐ろしいことです」とあって、文責者名の記載がないインタビュー記事とはいいいながら、『東京新聞』発表文と齟齬はなく、政治的・思想的発言になっている。政治や思想が蔑ろにされている

時代なればこそ、林京子の発言が政治的・思想的になることこそむしろ自然であり当然のことなのだ。その資格をそして義務も持つ人なのだから。

林京子は自己の被爆体験を盛り込んだ作品を書き続けてきた過程で、作品が政治性を帯びてきたのは『無きが如き』(81・6)からだろう。被爆者が生き続けていることで無きが如しにされてしまったは大変だ、自分は原爆の語り部になろう、の覚悟を決めた作品である。大田洋子が広島原爆の被爆者として言葉で表現しきれない原爆の無惨さを死にもぐるいで言葉にした作品が、原爆しか書けない〈原爆作家〉と差別され、原爆を書くことから退去した、被爆者差別社会とそれを反映した文学界のありようを証明して余りある先輩作家の存在を承知の上で、林京子は〈売れる〉ことを念頭においた営利や功名への欲望など微塵もなく孜々として己の文学を紡ぎ続けている。利益第一主義が隅々まで浸透して、性を露悪的に露出することの競い合いで売れる小説作りがされている現在、本来の小説は人生、人間を描き、読む者にヒトが生きたらとほどういうことを考えさせるものだという発想が衰微どころか消滅している現況下で、自分の「発言や文章が、歯牙にもかけられないことぐらい、肝に銘じて知ってい」て「虚しさは深い」が、それでも「与えられた私の場所で、その時どきに感じた想いを、綴っていくつもりである。あきらめないで。」と述べてもいる。

「あきらめないで」の言葉通り、林京子の文学は、凄惨、酷烈な自己の被爆体験を離れることのない立脚点としながらもその筆致が乾いているのは大陸育ちということによるだろう。上海、中国は故郷なのだ。(上海もの)が初めて書かれたのは、被爆体験を『祭りの場』とは視点を変え、さらに広角で掘り下げた連作『ギヤマン ビードロ』(78・5)の第五話に位置する「黄砂」からである。被爆体験ものの中に一見唐突に組み込まれた理由を後に、この二著を収めた文庫の末尾の「著者から読者へ」で「二つの命と人生」として語っている。「二つ」とは母の母胎を根にした父母からもらった一四歳までの上海時代と、八月九日の被爆を根にした以後である。この二つの関係を林京子は次のように位置づけている。

二つは木と竹ほどの差があり、つなぎようのない二つの根を、私の内に生やしています。上海時代を私の人生の陽の部分とすれば、被爆以降は陰、負の時代になります。必然的に、書くものも二つの時代に分かれますが、しかし二つの根をもつ人生の底に、一貫して流れているのが、戦争です。

連作のなかに「黄砂」をもち込んだのは、上海時代と八月九日以降の人生と生命。また私の底流にある戦争と時代を呼応させ、一つの環に結びたかったからです。それは、陽であったはずの上海時代も、負に転化する色濃い陰をもっているからです。

摺筆日「一九八八・三・二七」の記載されたこの文章は、ワシントン駐在勤務となった長男に同行して三年間暮らしたアメリカで書かれている。アメリカでの生活体験は、エッセイ集『ヴァージニアの蒼い空』、短編集『谷間』『輪舞』『ドッグウッドの花咲く町』『榎の木テーブル』

などに描かれるが、原爆を投下した当事国とその国を母国とする民衆の個人とを截然と区別した複眼を獲得し、林京子の人間的スケールを掂げている。アメリカ滞在中に計画しながら実現できなかったニュー・メキシコ行きは一年後に果たされる。いわば、アメリカものの総決算であり、原爆ものの原点、中軸をなす「トリニティからトリニティへ」である。トリニティは原子爆弾の威力を試した爆発実験場である。

林京子にとって上海時代と八月九日以降の〈二つの命と人生〉に、トリニティ体験をふくめてアメリカ時代がどう絡むのか。そこを考える前に近作「ぶーらんこ ぶーらんこ」(『群像』03・4)に目を注いでみたい。「ワタシ」が「もつとも幸福な時代」と思いこんでいる「路地で暮らしていた少女期」の回想が中心の作品である。国際都市上海の、イギリスやフランスの租界がありブロードウェイ・マンションが上海一の高層ビルだった時代に、四人姉妹は虹口にある路地で育った。虹口は日本人が多く住んでいて、ロシア人やドイツ人が小さな商店を営んでいる地域だったとは、上海からの留学生の話。「もつとも幸福な時代」だった路地の生活空間が戦争と無縁であったわけではない。記憶にある第二次上海事変時、路地の外を避難民が延々と続き、日本へ一時避難して戻った家は、日本兵による暴力と略奪でめっちゃめちゃに荒らされていた。母の〈嫁入り道具〉も子どもたちのひな人形も盗まれていた。この路地には中国人も多く住んでいて、隣家の大工の家の末っ子ティティがならす爆竹やかんしゃく玉をうるさいと怒鳴るのは、この一帯の持ち主である金持ちのテンソクの老太婆だ。公園のブランコはティティたちと「ワタシ」たちの共有の遊び道具だった。子どもたちは遊んだり喧嘩したりしたが敵対関係ではなかった。いよいよ日本へ引き揚げることになった時、老太婆の孫娘とその従姉を招いたお別れ会をした。そこには「娘たちの清らかな輝き」が満ちていた。「楽しかったじゃない、路地の家」と懐旧の想いに浸る一方で、子どもながら、「日中戦争の敵対国となった中国人の悲惨さ、侵略者である私たち日本人への、繰り返される抗日テロ事件を、一般人の日常生活のなかで十二分に体験し、みてき」てもいたのだ。

『ギヤマン ビードロ』第六話は前の「黄砂」を受けた形の、原爆投下後の姿を一変させた街、そこに展開された阿鼻叫喚から太平洋戦争勃発の日の上海へ思いが移る「響」である。その日まで林京子は自分が日本人であるという意識をもって行動したことはあまりなかったという。中国人の子どもたちと仲良く遊び、負けると上海語で罵り合いの喧嘩をし、唾を吐きかけたりもして、中国人の風俗を身につけた子どもだったという。(近年では全く見られなくなったが、私が初めて中国に行った二十余年前、仰天したのは階層の区別無く、知識人とされる大学教授すらだったが場所柄に頓着せず、やたらに唾や痰を吐くことだった。)だが、十二月八日が分水嶺になったようだ。すぐに変化はなかったとしても。十二月八日、三時か四時頃の未明、上海の町は砲声によって揺り起こされた。日本海軍の旗艦出雲がイギリスの砲艦を攻撃した砲声だったが、この砲撃は真珠湾攻撃と同時に起こされたのだった。日本人学校は平常授業だったが、小雨の降る校庭で、震えながら雨の中に立つ生徒に校長が、まず、出雲の戦果を伝えた上で、「今朝の砲声は、あなたたちの生涯にとって記念すべき響になるだろう、祖国日本の、重大な闘いの開

幕の砲声を、あなたたちは自分の耳で、確かに聞いたのである、戦いに参加したのである」と訓辞し、訓辞が終わると小雨の降る天に向かって両手をあげ、大日本帝国万歳！と叫んだのだ。生徒たちも校長先生の万歳に促され、呼応して万歳！ばんざい！と両手をあげて叫ぶ。と、「私」もみんなと一緒に両手を上げ下げして万歳を叫んだ。そのうちに「体は熱くなり、興奮していった。」

軍艦マーチが鳴って、私たちは運動場を行進した。行進しながら、私は未明の砲声を思い出していた。ずず——と腹に響く轟音をあげて炸裂した出雲の砲声が、どのような記念すべき響になつて私の生涯に残るのだろうか、と私は思った。校長の訓辞のように、戦いに参加した意識が私にもあった。それは、戦いの開幕にいあわせた重大さのせいもあったのだろうか、砲声は、私の柔らかい内蔵の胃や腸の粘膜に附着して、私を揺さぶりはじめていたのである。

出雲の砲撃の響きは、林京子にとって八月九日をもたらす本当の戦争の始まりだったのだ。被爆を描いた『ギヤマン ビードロ』の中におかれた章「響」はその意味で重要である。楽しかった思い出を袋いっぱい詰めた「もつとも幸福な時代」は、国籍を超えた子ども同士の天真な交流にあったが、それはまた、被侵略国側の子どもたちと侵略国側の子どもたちとしてでもあった。子どもにとって、そうと明確に意識されていなかったとしても。校長先生の熱のこもった訓辞は、海绵が水を吸うように小学生のところに染みこんだであろう。戦いに参加した意識を植え込まれて熱く作られた小国民はやがて、原子爆弾という究極の兵器の犠牲に供されることになる。

林京子の仕事のひそみにならつて小国民問題に触れておきたい。「世界の大部分の人民」の反対を無視してイラク攻撃を行った米英軍の暴挙に触れた加藤周一の文章中に、「歴史の審判」は今ではあり得ない。それは審判の結果が、手おくれになり、当事者の誰もが免責されるだろう時期にしかおこらない」（『朝日新聞』夕刊、03・7・17）という哀しすぎるが正鵠を射た一文があった。「歴史の審判」が機能していない好例として文部省の教育方針の逆行がある。通知表の評価項目に「国を愛する心情」「日本人としての自覚」が盛り込まれ、文部科学省が道徳補助教材として「心のノート」を配布したという。この配布と軌を一にして今夏八月七日、文科省所管の財団法人「モラロジー研究所」主催の講演会が京都で開催されたというが、この会は文部省、府教委、市教委が後援している。その際、研究所理事長廣池幹堂の挨拶文には、「我が国の歴史、伝統、文化のすばらしさ、とくに皇室を中心として培ってきた寛容の精神は（略）最も必要」と道徳の意義が展開されている。さらに呆氣にとられるのは京都市教委が後援した「教育研究会・未来」の講演会でなされたこの会の主宰者北村弥枝の発言である。「若い女性に殿方と同じように表に出て働くことが最高の喜びと教え」、「妻を放棄し、嫁を放棄させ、夫婦別姓などと言うほど狂わせ」、その結果「大和魂を持った子供たちを世の中に送り出すことができなくなった」、このため「神国日本としての意識を取り戻し、全世界の中心となる国になるためには」「子の心は胎教で母が教え」、「男性の運勢は女性の愛の出し方」に左右されるものであるから「妻とお母さんの心を取り戻すべき」という主張だったとい

う。アナクロニズムもいいところだが、「心のノート」配布を機に愛国心を掲げた道徳教育推進運動を地方行政が積極的に後押ししている状況が加速しているらしい。まさに小国民創りが堂々と闊歩し始めているのだ。先頃、パリで開催されたスポーツ大会の女子マラソン中継で、興奮した若い男性アナウンサーの「大和撫子」連呼には耐え難い不快感を覚えたが、一連の動向の反映だろうか。「歴史の審判」は今、ありえないと慨嘆する加藤周一の深い悲しみこそが真の知性であろう。

ところで、「ぶーらんこ」⁵「ぶうらんこ」⁶は、上海ものの『ミッシェルの口紅』(80・2)『上海』(83・5)の線上の作品だが、長らく離れていた上海ものに今、またなぜ立ち戻ったのだろうか。林京子はかつて、もし中国が投下した原子爆弾による被爆者となったとしたら、核の悪は悪としても書かなかったかもしれない、中国の中央上海に住んでいた者として罪の意識があるからという意味のことを語っている⁶。それは、戦争という一点において楽しかった上海時代が同根のものであり、「教室や校庭に子供の歓声が溢れ、職員室にはエンマ帖と睨めっこした先生が子供たちを待っている、あたりまえな日常の風景」の平和から遠ざかりつつある現状への深い憂慮によるからだろう。

「祭りの場」発表から数えて二八年、『文芸首都』に初めて作品を発表した時点にまで遡れば四〇年に及ぶ林京子の仕事を概観してみたい。日本近代文学会二〇〇二年度秋季大会での「グランド・ゼロに立つて」と題した講演で、「今まで『祭りの場』からずっと八月九日を書いてきましたが、視点を人間中心に書いてきました」と述べている。作家林京子は一九四五年八月九日の被爆によって誕生したのであり、「原子爆弾に関するかぎり、被爆者は人類の被害者」、国や人種の問題ではなく「人間としての被害者」⁷であり、さらに被爆者だけでなく「人間全部の命の問題」⁸と述べていて「核対ヒトの問題」を小説作法のスタンスとして「長い時間をかけた人間の経験」まで書き継いできた作家である。人間中心と一口に言っても、人間には自己、家族、友人、先生、さらにと広がりがあり、原子爆弾投下直後から半世紀余にわたるその間のその人たちそれぞれが辿ってきた心と肉体相俟つての死屍累々たる道程が描かれてきている。その描き方は個別への拘りであろう。林京子の文学世界は、林京子独自の具体的な体験、林京子自身の目や耳や感覚や学んだあるいは知った知識によつていて、事実離れた想像や虚構はとらない。自分は長崎の被爆者だから長崎のことしか書けないと言い、九日の長崎と長崎も漢字で書くと言う。個別の具体を普遍に昇華させている作家である。この方法に変化の生じたのは『無きが如き』(81・6)であろう。外表のたおやかさとは裏腹に林京子は強い人だ。個への拘りは政治的党派への巻き込まれの警戒にもなっている。原子爆弾投下は究極的テロ行為と私は思うし、このような卑劣な手段を使った戦争そのものを政治と考える私には、林京子が政治に厳しく一線を画そうとすることに時には解せない思いを抱いたこともあるが、政治や思想と無関係にこの問題を追求し続けることが果たして可能だろうかとも思い続けてもきた。

林京子自身は政治問題に食い込むという明確な意図を抱いてはいなかったかも知れないが『無きが如き』は遂に政治にコミットした作品である。林は被爆から三十数年がたって「八月九日のことがいろいろ層をなしてつづいてきている、その一方であれを風化させるような力もつよまっている、それをすれば出せるかと考えて、絵の画面のように光もあれば陰もある、はじまりのときもあれば終わりもある、一つの画面で見られる小説があればいいなと思って」「ページを追って読んでいかなければならない小説ではなく、重なつて読めるものと考えての方法だったと説明している^⑨。作者の意図が成功したかどうかは別として、明日発症するかもしれない急変に常時怯えながら一日一日を過ごすことの被爆者の不安や恐怖を、非被爆者の他者が想像力を駆使したとしても共有できるようなことではないのに、生き続けられている被爆者が現存することで、被爆者の苦悩、核の恐怖を、まるで無きが如きにされている政治風土への激しい怒りをこめた作者の強烈な批評精神に促された作品として私は読んだ。無きが如しにされてはたまらない。無きが如しにされてなるものか。林京子が原爆の語り部になることを決意した重要な作品なのだ。

その後の大きな転換点は「長い時間をかけた人間の経験」である。この作品については他で論じているので踏み込まないが、先に、この作品を人間中心の視点の作の範疇に入れたが、その次の「トリニティからトリニティへ」を用意した二十一世紀を最後の世紀にしてはならないという人類の緊急重要問題提唱という、視点が地球規模に拡大された作品でもある。原爆症その他被爆者ならではの苦悩と闘いながら逝った人たち〈無数の個の人〉への思いを深める遍路の道すがら、「戦争は、誰のための戦いなのだろう」という大命題に、今更に突き当たる。「命とは何だろう」と。六日九日の被爆者問題を突き抜けて世界各地の人々に襲いかかっている「内部の敵」なる「見えない恐怖」を凝視し、考える。考えることで創作という小説作法を逸脱した学術書の趣すら伺える文体に転化する。林京子が典拠の一つとした、私家版として少数刷られた手作りの『内部の敵^⑩』の最後の一冊が私の手に渡されたのだが、資料によって信憑性の認められるこの本の恐ろしい内容を、末尾につけられた訳者代表の肥田舜太郎の言葉から紹介しておきたい。

ジェイ・M・グールドの「内部の敵」は、核時代の始まり以降、異常に増加したアメリカ女性の乳癌の発症に明らかな地域差があること、その地域差は核原子炉施設の50マイル、或いは100マイル以内にある郡およびその集団、以遠の郡およびその集団、原子炉の風上の郡およびその集団と風下の郡およびその集団の乳癌死亡率の差異に一致していることを、疫学的に証明し、問題のあった地域について、政府機関が「異常はなかった」と発表した放射線被害報告から、統計学の高度な知識と優れたコンピューター技術を駆使して、隠蔽された低線量放射線による被害を見事に暴き出した貴重な調査研究です。

さらに、肥田が「体内に摂取された放射性物質からの低線量放射線の影響」に執拗に執着してきたのは、広島、長崎の被爆者の多数が、放射線の影響としか考えようのない複雑な病状に苦しみながら、「原爆放射線とは関係ない」として援護の対象から除外されてきたことへの強い憤り

と、アメリカで被爆米兵や核産業の労働者、死の灰降下地域の住民などが、彼等の痛や、診断のつかない疾病が放射線とは関係なしと突き放されていることへの疑問からだったという。この書の内容の説明の一助となる肥田が結びに引用した民医連の情報誌に掲載の斎藤記の言葉を、引用紹介しておきたい。

「放射線生物学」は低線量被爆に対する遺伝子の「応答」に研究の焦点を合わせてきています。生命の暴力的破壊ではなく、生命の存続に同伴する「変異」にこそ、解明すべき普遍的課題があると分かっていたからです。つまりそのことは「低線量放射線」が被害として生命現象に關与した場合、その時間的広がりを含みじくも示唆したものと云えます。

林京子は「長い時間をかけた人間の経験」を書き終えた後、原子爆弾そのものの投下によった「生命の暴力破壊」を受けた当事者ながら幸いにも生き延びて来られた一握りの人々の一人として、自身の問題を超えて、体内被爆低線量放射能を起因とする慢性肝炎や白血球減少症および、まだ未解明領域に属する二世三世への影響、さらには原子力発電所、核爆弾実験、劣化ウラン弾等々がもたらす「内部の敵」問題を剔抉する地平に進み出ることになる。そのために原子爆弾の原点である、広島投下の二〇日前になされた爆発実験場所、ニューメキシコ州のトリニティサイトへ旅立ちを實行する。トリニティサイトのグラント・ゼロに立った時の思いを中心に描いたのが、世界唯一最高の原爆小説「トリニティからトリニティへ」である。この作品についても既に述べているので、ここでは日本近代文学会での講演から、作品と重なるところもあるが、ナマの言葉の迫力をほんの一部分伝えることにする。展示室に展示された当時の機材は、実験から半世紀を経ているが今なおガイガー計数管を係官が当てると針は激しく揺れ、ガリガリの音を出して強い反応を示したという。実験時にできたクレイターは地面が泡だった状態で、熱と爆風と大地の中の成分が熱によってガラスになったり、丸い石のたまになったり鉄のかたまりになったりしているという。見学者は荒野の中にそれしかないそれに向かって黙々と歩いていく。

私もその後について行きました。結局、記念碑と向き合うということになるんです。荒野と向き合っておりますと、ものすごくお天気がよくて、空が真っ青に晴れているんですけど、空を飛ぶ鳥が一羽もない、虫の音もしない、そして風もなく、全く無音の世界です。その中に立っておりますと、そのうちに私は体がふるえてきてまして、名状しがたい感情が湧きあがったんです。

実験の行われた七月一六日は、この地方にしては珍しく豪雨だったという。その豪雨の中をついて閃光が走って荒野を焼き、山肌を焼いたと記録されていると聞いたとき、実感的にどんなに熱かつたろうかと叫び出しそうな衝撃に襲われたという。

私はトリニティを訪ねますまでは、人間が、六日、九日に被爆した人間が、最初の核の被害者だと思っていたのです。けれどもこの荒野に立ってみますと、人間よりも先に大地、そしてそこに暮らしているガラガラヘビですとか、あらゆる生命が先にやられていたのだ、と骨

身にしみて感じました。そして自然に涙があふれました。八月九日から私は被爆者として生きてきました。八月九日から派生しました肉体的な痛み、精神的な痛み、子どもを育てる時にこどもがいつ死ぬだろうかという不安、あの一瞬から派生した痛みの中で生きてきたことは確かです。しかし、トリニティの大地に向き合いましたときに、八月九日の日に、私の命の根に植えられた被爆という逃れようのない事実を実感しました。真正正銘の被爆者になった気がしています。

作中の最も感動的場面を肉声で聞いた私の心は激しく揺れ、放射線というものの恐怖を骨身にしみて実感するために私もトリニティに行かねばならぬと思ったのだった。林京子に「内部の敵」問題をそれこそ骨身にしみて考えさせたのは、明日、トリニティサイトに向けて朝早く発つための準備をしていたホテルで、たまたまつけたテレビが映し出した東海村の臨界事故のニュースだった。現実問題が目の前に起こったのだ。現実感覚からは遠い実験のなされるアメリカの僻地や、劣化ウラン弾の投下された中東ではなく、日常の生活空間からさほども離れていないところで。戦争という状況下ではなく、まずは平和な日本の日常で発生した事件である。東海村事故を素材として「内部の敵」問題の文学化に立ち向かった、現代文明下での最先端文学が「収穫」(『群像』02・1)である。

林京子は、核の文明を否定する力を持った言葉を発信し続けている文学者である。被爆後の彷徨に出会った氣息奄々の、林の表現による「イナバノシロウサギ」たちは誰一人、苦しいから死にたいとか、苦痛への耐えがたさから殺してほしいなどと言った人はいなかったという。水をください、助けて、の言葉ばかりだったと。人は生きるのが当たり前。生きようとする人の命を奪う権利など誰にもありはしない。

コレガ人間ナノデス

原子爆弾ニ依ル変化ヲゴランクダサイ

肉体ガ恐ロシク膨張シ

男モ女モ一ツノ型ニカエル

オオ ソノ真黒焦ゲノ目茶苦茶ノ

爛レタ顔ノムクンダ唇カラ洩レテ来ル声ハ

「助ケテ下サイ」

ト カ細イ 静カナ言葉

コレガ コレガ人間ナノデス

人間ノ顔ナノデス (『定本原民喜全集』Ⅲ)

原民樹もこれが人間か、と呻かれるような状態でも助けを求める人間の本来の姿を詠っている。命の大切さ。だが、原民喜は七六年に自死した。林京子が、その時点では人類を破滅に追いやる核問題に対する敢然とした挑戦という信念からではなく、直接的には我が子への被爆の影響という不安、恐怖に発した自己の被爆の苦悩を表現せずにはいられなかった思いから書いたとしても、その『祭りの場』は七五年である。以後の苦難の道程で、原爆の語り部を全うし、そこから続く、今世紀をふくむ未来に向けての地球的課題である「内部の敵」という「見えない恐怖」への警告というスケールで、林京子の成し遂げ、なお、なし遂げつつある仕事の非常さ、大きさを世界の知性がどこまで受け止められるかが、「最後の世紀」になることを避けるための課題といえるだろう。

(二〇〇三・九・二〇)

注

- 1、『最後の世紀』避けるために（『朝日新聞』03・9・7）
- 2、『イラク、自衛隊より被爆治療の経験を』（『東京新聞』03・8・9）
- 3、『暴力しずめる言葉こそ』（『朝日新聞』夕刊、03・9・11）
- 4、『戦争と原爆忌』（『東京新聞』夕刊、03・8・5）
- 5、『祭りの場—ギヤマン ビードロ』（講談社文芸文庫 88・8）
- 6、『わが文学の原風景』（小学館、94・10）
- 7、対談（『社会文学』第一五号、01・6）
- 8、インタビュー（『朝日新聞』、00・11・16）
- 9、前掲の6
- 10、『内部の敵』高くつく核原子炉周辺の生活 ジェイム・エム・グールド、放射線・公衆衛生プロジェクト（個人名省略）共編、肥田舜太郎（共訳者名略）訳（発行者 肥田舜太郎、99・2・10）